高等女学校における立山登山の歴史

高木三郎*

はじめに

筆者は、昨年本書において、富山県内の旧制中学校における立山登山の歴史を考察した。本稿ではその続編として、富山県内の高等女学校における立山登山の歴史を考察する。方法としては、昨年と同様に、「校友会誌」に掲載されている登山記録の分析を中心に、当時の新聞記事も活用して、高等女学校における学校登山の実態を明らかにしたうえで、その中における立山登山の意義を考えることとする。

登山記録を記した校友会誌が多く残っている学校は、県立富山高等女学校、県立高岡高等女学校、市立富山高等女学校、魚津高等女学校であった。そこで、本稿では、この4校における学校登山を手がかりにして考察を進める。他の多くの女学校でも学校登山が行われていることが確認できているが、資料が少ないため今回は取りあげないことにする。

県内女学校における学校登山を考察するに先立って、女学校登山に関わる全国的な動向を押さえておきたい。そもそも明治以降も、伝統的な儒教的女性観の影響で、積極的に身体を動かすことは“女”にあるまじき行為であるとする意識が根強く残っていた。しかも登山は、男性には成人登山の伝統もあって馴染みのある活動であったが、女性にとっては、明治以降も女人禁制の意識が根強く残り、親しみにくい活動であった。そのため、女性のあいだで登山が普及するためには、女性が運動・スポーツを行いやすい環境になることと、女人禁制の意識が弱まることが必要であった。そのような環境を備えていたのが、近代的な「学校」という組織であった。「学校」という枠の中で女学生たちは運動するための大義名分を与えられていった。また、登山については、古い迷信にとらわれない、しかも登山経験のある教師が多くいたことで可能となった。教師が引率するからこそ、生徒も保護者も安心して参加できたことであろう。しかし、その学校登山を実施するにも多くの困難があった。

1　女学校登山の誕生

女学校登山の全国的な動向をまとめたものとしては、板倉登喜子・梅野淑子共著の『日本女性登山史』[1]がある。それによれば、女子の学校登山は、明治35年（1902）、長野高等女学校の4年生全員を対象とした戸隠山登山を嚆矢とする。同校では大正14年(1925)まで24年間学校登山を継続し、明治39年（1906）からは富士登山も行った。同校で登山を推進したのは初代校長の渡辺敏で、登山目的は体力向上にあった。その後、女学校や女子師範学校、女子大などで学校登山が増えていったとされる。

その初期の学校登山の困難を物語るエピソードがある。女学校登山の推進者であった長野高等女学校の初代校長の渡辺敏は、明治32年（1899）、全国高等女学校会議の席上、着物のままでは下半身の運動ができないとして、「女学生に袴を着けさせるべきことを主張した。この時、渡辺校長は多数の会員から嘲弄的口調で攻撃されたということである」[2]。そもそも高等女学校においては、立派な母となり、立派な男子を産み育て

* 富山県［立山博物館］

る母性としての健康・体力づくりが必要との観点から、体育の振興が重要な柱であった。しかし、体育は「女らしさ」を損なうという心性も社会的に存在していたため、高等女学校での体育はそれほど熱心に行われていなかった。正課体育の授業内容は、体操・遊技が中心で、競技スポーツは取り上げられていなかった。そのため、体育時の服装も、着物のままであるのが普通だったのである。

ところが、大正時代に入り、「良妻賢母思想の再編」が必要になってきた。１点は、第一次世界大戦で欧米諸国の女性の持つ活動力を知り、日本の今までのような従順で消極性を求める女性観では、世界に通じる一等国にはなれないという不安が国家に起こったこと。もう１点は、大正デモクラシーと重なり、女性問題が社会化し、女性解放思想が登場したという社会認識の大きな変化であった。教育学者の小山静子氏は『良妻賢母という規範』という著書のなかで、第一次大戦後の女子教育論において、最も強く主張されたこととして、高等教育の実施と、体力の充実そのための体育の振興があったことを指摘している。そして、「従来の体育振興を求める意見が、主に次代の国民を生み、育てる母としての役割に着目していたのに対し、この時期には新たな論点も加えて論じられている。すなわち、欧米女性と比べて遜色のない女性、男性の代替労働に耐え得る健康強壮な女性を求める観点から問題が取り上げられていた」とし、それらの主張が大正８年の高等女学校令改正に取り入れられたと指摘している[3]。

そのため、従来からある「運動することは、将来の健康な母親を育てるために必要だ」という考えにとどまらず、「活動力や積極性を備えた新しい女性を育てるため」に、競技スポーツが奨励されるようになっていった。大正10年頃からは、府県下女学校対抗の競技会が盛んに開催されるようになり、競技性を強めていったといわれる。体育奨励に合わせるように、体操服の改良も進められることになった。女子体操服としておなじみのブルマース（丈は膝上）が普及し始めるのは、大正10年代といわれている。文部省自ら「体育運動ノ振興ニ関スル件」を発し、体育の普及・発達を促したのは、大正15年のことである。女性にもスポーツが奨励されるようになって、女学校でも登山を実施しやすい環境となった。

一方で、民俗文化の観点から、大正期以降、山水ブームが見られるようになったという指摘もある。民俗学者の石森秀三氏は、日本では江戸時代から旅の文化が発達してきたとした上で、大正期以降の特徴として、①月２日の休日制の導入によって短期間の旅行に対する欲求が強まったが、鉄道の発達がそれを可能としたこと、また鉄道の発達が団体旅行の隆盛の礎をきずいたこと、②海水浴ブームと山水ブームにみられるように、自然と遊ぶための旅がブームになったこと、の２点を指摘している[4]。水泳と登山は、鉄道の発達もあって、大正期以降急速に民衆に普及した。しかしそれは、スポーツとしてというよりも、江戸時代から発達した旅の文化の延長としての観光旅行として、しかも夏の快適な避暑法として普及した側面もあったといえよう。

また、社会学者の坂上康博福島大学教授は、中谷重治の論文を紹介して、昭和５年（1930）時点で、民衆レベルで最も普及していたスポーツは、１番目が野球、２番目が水泳、３番目が山登りであったと指摘している[5]。日本にスポーツが広まるにつれて、水泳と山登りも、スポーツと認識されるようになったといえよう。

このように水泳と登山は、観光旅行という側面とスポーツという側面を合わせ持つものとして、民衆に親しまれるようになったこともあって、学校教育にも取り入れられていった。しかも、水泳と登山は特別な技術がなくても取り組むことができるスポーツであり、体力に合わせて計画をたてることができるという特徴がある。そのため、両者は小学校から取り入れられることになった。

しかし、立山登山のような高山への登山となると、それは容易ではない。しかも、立山は女人禁制の山であるという意識も重なって、富山における女子の立山登山普及にはなお時間がかかった。

2　富山県における女学校登山の展開

2．1　県立富山高等女学校の学校登山

2．1．1　県下初の立山登山

県内の高等女学校における学校登山は、大正８年の県立富山高等女学校（以下、県富女）と富山女子師範学校（以下、女子師範）合同の立山登山を嚆矢とする。この時期に行われた要因としては、前述したように、第一次大戦後、女性にも、欧米諸国の女性に負けない体力作りが求められるようになったという時代状況の中で、学校の特殊事情があった。

女子師範は明治９年の新川県師範学校女子部を起源とする。一方の県富女は、明治34年、富山県で最初の女学校として設立された。しかし財政難のため、県富女は師範学校の校舎の一部を利用して設立され、校長をはじめ教諭も両校兼務の者が多かったため、行事も合同で行うことが多かった。大正４年に女子部が上新川郡堀川村に移転し、大正６年には富山県師範学校規則の改正で従来の女子部を完全に独立分離し、校名も「富山県女子師範学校」と改め、佐々木松蔵校長を初代校長として開校した[69]。県富女も同地に移転し、女子師範学校長が県富女の校長も兼務した。しかも、大正６年、女子師範に本科二部が設置されて、高等女学校卒業生が女子師範に入学できるようになったので、両校の関係は一段と密接になった。これらのことから、女子団体初の立山登山は、独立したばかりの女子師範の存在をアピールするねらいもあったと思われる。「女子師範学生の初登山は前年に結成した県下女子教員協議会奮起のアドバルーンでもあった」という指摘もある[71]。

また、『富山日報』（大正8.6.30）は、前日の富山女子師範同窓会で立山登山決行を決議したこと、県の奉幣使一行の出発と連れだって行き、７月25日の山開きの日に頂上をきわめること、佐々木校長が同窓生らに5、6年前から毎年夏になると立山登山断行を攻められていて、ついに今年決行を決意したこと、などを記している。この記事から、女子師範同窓会では、この年に突然立山登山の話が持ち上がったのではなく、数年前から要望が出ていたことが窺える[89]。全国的な登山ブームもあり、女子師範同窓生の中で立山登山に憧れる者がいたとしてもおかしくない。しかし、男子と違って女性の場合、個人で行くことは不可能に近かった。彼女たちが立山登山を行うには、同窓会という組織と教諭の協力が不可欠であった。教諭側にとっても、同窓会の要望ということであれば協力しやすかったであろう。

ところで、この時の立山登山はどのような内容だったのだろうか。県富女『県立富山高等女学校同窓会報21号』（大正8.12.25）には、下山時に立山温泉前で撮影したとされる記念写真の他、行事欄に「両校の立山登山隊出発」と記されているだけである。

しかし、『富山新聞』（昭和50.8.18）の「越中おんな一代11」には、参加者の一人松田キヨコさん談として、「登山は富山女子師範の佐々木松三校長先生が発案されたと聞いています。博物の先生で植物にも明るく、立山へ何度も登られた人だそうです。この校長先生やほかの先生を信頼して連れられて行ったがです。」とか、「木綿のひとえに昼夜帯を締め、すそをまくって赤い腰巻きを出し、白い脚絆にわらじばき、越前ござに師女立山登山と筆太に書いてあるスゲがさ、背中にはイリ粉など食糧や着替えを包んだふろしき」といういでたちであったことが記されている。また、２日目、「弥陀ヶ原から一の谷にさしかかったころ雷が鳴り、ものすごい雨になったのです。道は川のようになり、はじめはすその乱れが気になった腰巻きがぺったり体にくっつき歩きにくく、雷で気絶する人も出るありさまでした」とも記されている[90]。

立山登山出発直前の『富山新報』（大正8.7.21）には、同校教員の話として、「服装については目下協議中です。莫蓙・笠を着けるもどうかと思われるが、できる限りは軽装でなくてはならぬ。何分今回初めての企てなので学校側でも種々頭を悩ましている。最も立山は

高山であるだけに体育上は勿論、植物その他の方面においても理化学研究の上よりも非常に有益な事と思っている」と記している。

また、出発の様子について、『富山新報』（大正8.7.24）は、「女子師範卒業生十名、高女卒業生七名、両校在校生二十一名から成る娘子軍立山登山隊は佐々木校長、熱海教頭、三田村、吉田両教諭及び江本、駒形、吉見、松田四教諭に引率され、赤十字病院の直江医師及び酒井瀬川両看護婦付添にて、予定の如く昨朝いよいよ登山の途に就いた。…校門まで残留教員生徒の見送りを受け…二十六日帰着する予定…」と記している。

これらの記事を総合すると、この立山登山が体育及び理化学研究に有益であると考えられていたこと、登山時の服装に悩んだこと、同窓会の計画に師範の在校生や高等女学校の生徒の希望者が参加させてもらったことなどがわかる。また、日程は4泊5日であった。すなわち、23日に富山市堀川小泉の学校を出発して、芦峅寺の宿坊で宿泊。翌24日は材木坂から獅子が鼻を経由して室堂に宿泊。明くる25日は雄山山頂の雄山神社を参拝して下山し、地獄谷を見学してから追分に至り松尾坂を下って立山温泉に宿泊。26日は、数日来の雨による道路破壊のため安全を期して、温泉に滞在した。そして27日に帰宅している。

なお、この登山への反応は、新聞によってかなり相違している。『富山新報』は、7月30日から、「緑水生」なる人物の、「踏破る一万尺、立山の嶮」と題する5回の連載記事を掲載している。そのなかには、「一人の落伍者なく病人を出さず予定の計画を遂行し得たるは隊員一同の欣幸とする所は勿論、女子といえども決心次第にて或る程度迄男子に比して負けず劣らず仕事を為し得るものなりとの証を得たるものなり、以て天下の婦人の為め大いに気炎を吐きたるものと謂うべし…」という部分があり、この登山の意義を高く評価している。それに対して『富山日報』は、2日目の暴風雨を受けて、7月28日付けの記事で、「山神の怒りに触れた女学生の登山隊、一の谷の嶮で大雷鳴、肝を潰して二名気絶」という見出しで批判的に報じたあと、この登山について触れていない。

2.1.2　立山登山の再開

同校の立山登山はその後しばらく行われることがなかった。かわりに、大正10年には黒部、大正11年には五箇山、大正12年には能登巡りを行っている[10]。大正13年になると、立山登山の計画があったことを伺わせる記事が出てくる。『富山日報』（大正13.73）には、「富山女師、同高等女学校では‥立山登山の希望者を募り校医の厳密なる身体検査を行い証明を得た者より約30名選抜して平尾教諭その他2、3の教諭引率のもとに登攀を決行する予定であると」という記事がある。しかし、『北陸タイムス』（大正13.7.23）は、「富山女子師範高女校の生徒諸嬢、憧憬にもへる立山へ一度は必ず登らんものと力んではいたが、ついに今年度は学校として団体をつのって公式に登山することは中止のやむなきに至った…」と書いている。また、同新聞（大正13.8.1）には、校長が生徒に立山登山の希望を聞いたところ多数いたので、女生徒登山の可能性を探るため女性教諭を含む6名の調査団が立山登山を行うことになり、「女も男子に負けぬという自信を体験し」たという記事が載っている。これらの記事から、大正13年には、学校登山としての立山登山は実際には行われなかったが、実施に向けての動きがあったことは間違いなかろう。その後、『富山新報』（大正15.5.28)に、同校の齋藤教諭の談話として、「昨夏県立富高女生約20名が立山踏破を企てたが天候不順のためついに決行する機会を失ったが今年こそは是非決行して宿年の希望を達すべく…」と記している。

このように、大正10年代に立山登山の計画があったことを窺わせる資料がある。しかし実際には昭和2年まで行われることがなかった。なかなか再開されなかった理由として、大正8年の悪天候の体験が大きく関係していたのではないだろうか。あの悪天候は、女子の体力に対する不安と、世間の女人禁制意識を増幅させたと思われる。それらを払拭して立山登山を再開できる環境にするためには、黒部や五箇山といった容

易な登山で実績を積み重ねることが必要だと考えられたのであろう。

昭和2年、女子師範及び県富女の立山登山がやっと再開されることになった。同校の『同窓会報28号』(昭和3.5.15)には、各運動部の活動として山岳部の活動も紹介されている。そこには、「幾多の困難を予想しながらもなお断然この部を新設し、以て全国女子体育界に範を垂れる。七月二十四日立山頂上雄山神社祠前に発会式を行う。」とある。何故神前で発会式を行ったのであろうか。登山中の天候次第で山岳部の存続が決まるという思いがあったからではないだろうか。『富山新報』(昭和2.7.27)は、下山時の平尾教諭の談話として「…全く天候に恵まれ女が山登りをすればお山はアレる云々と古へから伝えられているがこれらは見事うらぎられた…」と報じている。天候に恵まれたことで、女人禁制が迷信であることを証明できたと強調しているのが印象的である。

なお、『北陸タイムス』(昭和2.7.27)は、「はるか東の皇城の方に向かって御皇室の弥栄へを三唱、かくて同校山岳部の発会式をあげ頂上の観をほしいままにして雄山を下り、三ノ越の御歌碑前で再び『立山の御歌』を合唱した…」と報じている。三ノ越の『立山の御歌』の歌碑は、この年の5月に完成したものである。また、一行は、昨年10月に竣工したばかりの御歌新道(浄土山から国見を経由して立山温泉に下る道)の通り初めをして立山温泉に下っている。このように過剰ともいえるほど皇室に敬意をはらう行動をとっているのが目を引く。これは、女学校登山への抵抗を払拭するため、皇室の権威を利用しようとしたとも考えられる。

ところで、この年の登山日程は、7月22日からの3泊4日であった。1日目は、千垣まで電車を利用した後、称名滝、八丁坂を経由して弘法小屋に宿泊。2日目は、地獄谷を見学して室堂営林署小屋泊。3日目は雄山神社参拝後、浄土山、御歌新道を経由して立山温泉泊。4日目は鬼ヶ城を経由して千垣駅から電車で帰校している。職員7名で、参加生徒は32名、費用は9円であった。なお、同校山岳部では、秋に1泊2日で五箇山遠足を実施している。

この年の成功により、同校では、その後毎年、立山登山を実施するようになる。(表1)のとおり4泊5日を基本とし、初期には五色ヶ原まで足を伸ばしていたが、のちには材木坂を経由して下山することが多くなっている。これは天候の影響もあったようである。

2.2　県立高岡高等女学校の学校登山

2.2.1　学校登山の開始

県富女の次に学校登山の歴史があるのは、県立高岡高等女学校(以下、県高女)である。県高女は、富山県で2番目の女学校として明治40年に開校した。県高女の学校登山は、大正9年の五箇山登山に始まる。同校校友会誌『ふたがみ12号』(大正9.10.30)には、引率した教員の登山記録が掲載されている。その中には、「夏期登山も一種の流行だが、今年の様に虎疫のために海水浴すら控えさせられる時には、唯一の消夏法でないだろうか。女子の体力を試験する、または修養する好機会である。我が校では最初の試みであるから、なるべく簡単に、五箇山へ両3日の旅行を試みた。一行生徒二十三名で、三・四年生中の希望者のみである。卒業生の希望者も加えるはずだったが、申込は無かった」と記されている。

この年に、学校登山が始まった理由としては、第一次大戦後、女子体育が奨励されるようになったことのほかに、前年の女子師範と県富女合同の立山登山が刺激になったと思われる。なお、このときの県高女の校長は、前年まで県富女の教頭であった熱海安吉であった。校長が、学校登山の経験者であったことも、開始のきっかけになったと思われる。参加者が少なかったことについて、「女が山に行くものでない」という女人禁制の風潮による保護者の反対が根強かったからだといわれている[11]。

『ふたがみ12号』(前掲)の登山記録には、「生徒の健脚と元気とには感服した。決して男子には劣らぬ。…世の杞憂論者の一考を煩わしたいと思う。一行がこの旅行より受けた利益教訓は、霊肉二方面において直接間

（表１）富山県内高等女学校における主な登山記録一覧

時代		掲載文献	参加者	日程	行程
大正8年	県富女	富山新報（大8.7.30～8.4)「立山の嶮」	生徒38名、教諭8名	4泊5日	学校（徒歩）→芦峅寺（泊）。材木坂→一の谷→室堂（泊）。雄山→地獄谷→松尾峠→立山温泉（泊）。同（泊）。下山。
9年	県高女	12号（大9.10.30）「五箇山行」	生徒23名、教諭数名	2泊3日	高岡（汽車）→城端（徒歩）→細尾峠→下梨(泊)。祖山→大牧温泉（泊）。長崎→青島駅（解散）。
10年	県富女	日報（大12.7.5）	？	？	黒部方面、詳細不明
11年	県富女	日報（大12.7.5）	？	？	五箇山、詳細不明
11年	魚女	1号（大14.10.31）「学校日誌」	生徒15名、教諭8名	2泊3日	三日市駅→鐘釣温泉（泊）。猿飛→黒薙温泉
12年	県富女	日報（大12.7.5）	？	？	能登方面、詳細不明
12年	県高女	15号（大12.10.30）「黒部探勝記」	？	3泊4日	高岡→三日市（軽便）→下立（徒歩）→黒薙（泊）。鐘釣（泊）。猿飛→新鐘釣（泊）。下立（電車）→高岡。
12年	市富女	2号（大13.6.30）「黒部探勝の記」	？	2泊3日	下立（徒歩）→鐘釣（泊）。猿飛→鐘釣（泊）。下山
12年	魚女	1号（大14.10.31）「学校日誌」	生徒17名	2泊3日	黒部峡谷、詳細不明
13年	魚女	1号（大14.10.31）「学校日誌」	？	2泊3日	新鐘釣温泉（泊）。猿飛または祖母谷→鐘釣温泉（泊）。
14年	県高女	17号（大14.10.30）「立山登山記」	20余名	3泊4日	千垣駅（徒歩）→藤橋ホテル（泊）。材木坂→一の谷→室堂（泊）。雄山→室堂→地獄谷→追分→立山温泉（泊）。下山。
15年	県高女	18号（大15.10.30）「黒部探勝記」	生徒12名、教諭4名	2泊3日	宇奈月駅（徒歩）→鐘釣温泉（泊）。猿飛→鐘釣（泊）。宇奈月駅（電車）。
15年	県高女	18号（大15.10.30）「立山登山記」	20名弱	4泊5日	千垣駅→藤橋（泊）。雨、称名滝往復、藤橋（泊）。材木坂→雨、弘法（泊）。一の谷→雄山→追分（泊）。材木坂→下山
昭和2年	県富女	会報28号（昭3.5.15）「登山部」	生徒32名、教諭7名	3泊4日	千垣（徒歩）→八丁坂→弘法（泊）。地獄谷→室堂（泊）。雄山→浄土→御歌新道→立山温泉（泊）。帰富。
2年	県高女	19号（昭2.11.18）「黒部探勝記」	生徒20名、教諭6名	2泊3日	宇奈月駅（徒歩）→鐘釣温泉（泊）。卒業生のみ祖母谷往復、鐘釣（泊）。帰校。
2年	市富女	日報（昭2.7.28）	？	3泊4日	立山登山、詳細不明
3年	県富女	会報29号（昭4.5.15）「立山登山の記」	一行34名	4泊5日	千垣（徒歩）→材木坂→弘法（泊）。雨、室堂→営林署（泊）。雄山→別山→室堂（泊）。浄土山→立山温泉（泊）。帰富。
3年	県高女	20号(昭3.12.1)「黒部探勝記」	一行20余名	2泊3日	宇奈月駅（トロッコ）→猫又→鐘釣温泉（泊）。猿飛→小黒部→鐘釣温泉（泊）。帰校。
3年	市富女	7号（昭4.11.30)「第二回立山登山の記」	生徒28名、教諭5名	4泊5日	千垣→称名滝→弘法（泊）。一の谷→営林署（泊）。雄山→別山→測候所（泊）。温泉組と浄土山・ザラ峠・温泉組。帰富。
4年	県富女	会報30号（昭5.5.16）「登山部記事」	生徒21名、教諭8名	4泊5日	八町坂—弘法（泊）。一の谷→室堂（泊）。雄山→別山→地獄谷→室堂（泊）。浄土山→五色ヶ原→温泉（泊）。帰富。
4年	市富女	8号(昭5.8.25)「登高行の思ひ出」	一行27名	4泊5日	千垣（徒歩）→称名滝→弘法（泊）。一の谷→営林署（泊）。雄山→五色避難小屋（泊）。温泉泊。帰富。
5年	県富女	会報31号（昭6.8.5）「運動部行事」	生徒24名、教諭7名	5泊6日	立山登山、詳細不明
5年	市富女	9号(昭6.6.24)「立山登山記」	生徒19名、教諭8名	4泊5日	千垣（徒歩）→弘法（泊）。一の谷→室堂泊（地獄谷）。雄山→別山→室堂（泊）。浄土山→ザラ峠→温泉（泊）。帰富。
6年	県富女	会誌創刊号（昭7.7）「登山部」	生徒25名、教諭8名	4泊5日	雨、称名小屋（泊）。八丁坂→追分（泊）。地獄谷→雷鳥沢→剱御前（泊）。別山→雄山→追分（泊）。下山
6年	魚女	6号（昭和6.11.15）「憧れの立山へ」	一行27名	3泊4日	千垣（徒歩）→材木坂→弘法（泊）。一の谷→室堂（泊）。雄山→五色→立山温泉（泊）。帰校
7年	県富女	会誌2号（昭7.12）「立山登山記」	生徒24名、教諭10名	4泊5日	千垣（トロッコ、）→八丁坂→追分（泊）。一の谷→営林署（泊）。雄山→別山→剱御前（泊）。雷鳥沢→追分（泊）。材木坂→下山。
7年	県高女	24号（昭7.12.1）「立山登山の記」	生徒20余名）	3泊4日	千垣（徒歩）→称名坂→追分（泊）。一の谷→地獄谷→雷鳥沢→剱御前（泊）。別山→雄山→佐良峠→立山温泉（泊）。下山
7年	市富女	11号(昭8.11.8)「立山登行記」	？	4泊5日	千垣（徒歩）→称名滝→弘法（泊）。一の谷→営林署（泊）。雄山→別山→（同泊）。浄土山→五色ヶ原→温泉（泊）。下山
7年	魚女	（日報昭7.7.14）（新報7.25）	一行20余名	3泊4日	千垣（徒歩）→称名新道→称名小屋（泊）。一の谷→地獄谷→室堂（泊）。雄山→温泉（泊）。帰校
8年	県富女	会誌3号（昭和8.10）「立山登山の記」	生徒30名、教諭6名	4泊5日	千垣（徒歩）→称名滝→追分（泊）。一の谷→浄土→室堂（泊）。雄山→別山→剱御前（泊）。雷鳥沢→追分（泊）。材木坂→下山

8年	県高女	25号(昭8.12.8)「立山登山記」	一行25名	4泊5日	千垣(徒歩)→称名滝→追分(泊)。室堂(泊)。雄山→追分(泊)。松尾峠→立山温泉(泊)。下山
8年	市富女	12号(昭9.7.22)「登高行」	一行13人	5泊6日	千垣(エンジン)→藤橋(徒歩)→称名滝→弘法(泊)。営林署(泊)。雄山→別山→(同泊)。雨(同泊)。追分→温泉(泊)。下山
8年	魚女	8号(昭9.12.23)「学校日誌」	?	6泊7日	立山登山、詳細不明
9年	市富女	13号(昭10.7.15)「富士登山記」	生徒6名、教諭3名	4泊5日	富山駅(汽車泊)→大月駅(バス)→吉田(自動車)→馬返し(徒歩)→八合目ホテル(泊)。頂上→精進湖旅館(泊)。河口湖(泊)。船津→吉田→大月→富山。
10年	県高女	27号(昭10.12.1)「立山登山の記」	一行24名	3泊4日	千垣(徒歩)→追分(泊)。一の谷→雷鳥沢→剱御前(泊)。雄山→松尾峠→立山温泉(泊)。下山
10年	市富女	『記念写真帳』(同校山岳部、昭和10年)	生徒24名、教諭3名	4泊5日	千垣(徒歩)→称名滝→弘法(泊)。一の谷→室堂(泊)。雄山→別山→室堂(泊)。浄土山→五色→ザラ→温泉(泊)。下山
10年	魚女	10号(昭和11.3.17)「立山登山の記」	不明	5泊6日	千垣(徒歩)→称名ホテル(泊)。大日富高ヒュッテ(泊)。剱御前(泊)。別山→雄山→五色小屋(泊)。立山温泉(泊)。下山
11年	県高女	28号(昭12.3.6)「登山日記」	生徒20名	3泊4日	称名滝→追分(泊)。一の谷→雷鳥沢→剱御前(泊)。雄山→室堂→立山温泉(泊)。下山
11年	魚女	(日報7.3)		4泊5日	称名(泊)。大日→乗越(2泊)。別山→ザラ→温泉(泊)。帰校
12年	県高女	29号(昭13.3.6)「立山登山記」	一行20数名	3泊4日	千垣(徒歩)→称名滝→追分(泊)。一の谷→剱御前(泊)。雄山→室堂→松尾峠→温泉(泊)。帰郷
12年	県高女	日報(昭12.7.13)	?	?	1班立山、2班黒部、3班上高地・焼岳の計画。詳細不明
12年	市富女	『記念写真帳』(同校登山部、昭12.7)	生徒20名、教諭5名	5泊6日	信濃大町→池田松川(泊)。常念小屋(泊)。常念頂上→一ノ俣山荘(泊)。槍頂上→(同泊)。上高地→平湯(泊)。帰富。
12年	魚女	日報(7.18)	?	5泊6日	称名(泊)。大日ヒュッテ(泊)。剱御前(泊)。別山→雄山→ザラ峠→温泉(泊)。帰校
13年	県高女	30号(昭14.3.10)「立山の一日」等	?	?	粟巣野駅(徒歩)→八丁坂→追分(泊)。地獄谷→剱御前(泊)。あと不明
13年	市富女	17号(昭14.12.22)「教務日誌抄」	?	?	立山登山出発とのみ、詳細不明。
14年	県高女	日報(7.29)	生徒32名、教諭4名	3泊4日	大日平(泊)。剣御前(泊)。温泉(泊)。帰校
14年	市富女	17号(昭14.12.22)「教務日誌抄」	?	?	立山登山出発とのみ、詳細不明。
14年	魚女	14号(昭14.12.30)「学校日誌」	?	3泊4日	詳細不明
15年	県富女	立山登山記念写真(個人蔵)	一行37名	?	立山登山実施、詳細不明
15年	県高女	32号(昭16.3.15)「学校日誌」	?	?	立山登山と黒部探勝、詳細不明
15年	市富女	18号(昭16.3.15)「教務日誌抄」	?	?	白馬登山実施とのみ、詳細不明。
15年	魚女	15号(昭和15.12.20)「立山登山」	生徒28名	4泊5日	粟巣野駅(徒歩)→大日ヒュッテ(泊)。剱御前(泊)。前剱→(同泊)。雄山→追分→温泉(泊)。帰校。
16年	県富女	会誌18号(昭17.3.12)「行事一覧」	?	?	立山登山実施、詳細不明
16年	県高女	北日本(7.31)	一行44名	3泊4日	追分(泊)。(雨)雄山→室堂(泊)。浄土→温泉(泊)。帰校
16年	魚女	16号(発行不明)「立山登山記」	不明	3泊4日	八丁坂→天狗小屋(泊)。浄土山→雄山→剱御前(泊)。室堂→御歌新道→砂防工事事務所(泊)。帰校
17年	県高女	北日本(7.4)	?	?	立山及び白馬登山の予定。詳細不明
17年	市富女	北日本(8.2)	?	4泊5日	弘法(泊)。剱御前(泊)。別山→雄山→室堂(泊)。浄土→立山温泉(泊)。帰校
17年	魚女	17号(昭和18.1.25)「立山登山記」	一行30名	2泊3日	粟巣野(徒歩)→大日富高ヒュッテ(泊)。別山乗越→雄山→天狗小屋(泊)。下山
18年	県富女	立山登山記念写真(個人蔵)	一行41名	?	立山登山実施、詳細不明
18年	市富女	「記念アルバム」(個人蔵)	一行49名	4泊5日	弘法(泊)。剱御前(泊)。別山→雄山→室堂(泊)。浄土→立山温泉(泊)。帰校

凡例:本表は、富山県立図書館及び当該校所蔵の同窓会報と校友会誌に記された登山記録と、学校登山に関する新聞記事を、整理し編集したものである。

接尠少ならぬことと信ずる」と記されていて、この登山が女学生の体力を試す先駆的試みだったことがわかる[12]。

その後、大正10、11年は何もなかったが、同12、13年に黒部を探勝し、同14年にはついに立山登山を実施するまでになった[13]。

2.2.2　立山登山の展開

『ふたがみ17号』（大正14.10.30）には、大正14年の立山登山記録が記されている。それによれば、教諭数名の引率で生徒が20余名参加している。日程は3泊4日で、1日目は藤橋ホテル泊。2日目は材木坂を経由して室堂泊。3日目は雄山登頂後、松尾峠を経由して立山温泉泊。4日目に帰校している。『高岡新報』（大正14.7.30）には、希望者40余名から医師の健康診断で22名を選び、熱海校長含め5名付添の計画と記されている。この登山についての反響は不明である。しかし翌年も実施されたことからすると、特に大きな問題は起きなかったと思われる。同校の大正9年以来の登山実績が功を奏したとも考えられる。

大正15年の立山登山については、『ふたがみ18号』（大正15.10.30）に、記念写真とともに、登山記録が掲載されている。参加生徒は2年生以上の希望者20名弱で、日程は前年と同じ予定だったが、雨のため予定を大幅に変更して4泊5日で、雄山登頂を果たしている。なお、同年には黒部探勝も同時期に実施している。

同校ではその後、黒部探勝は継続しているが、立山登山はしばらく実施していない。立山登山の実施が確認できるのは、昭和7年以降である。同校の登山記録は（表1）にまとめている。同校の立山登山は、3泊4日を基本としていたようである。昭和7年にはザラ峠まで足を伸ばしているが、それ以外はザラ峠・五色ヶ原方面まで行くことはなかった。剱御前から雄山まで縦走後、松尾峠を経由して立山温泉に泊まる日程が多かった。

2.3　市立富山高等女学校の学校登山

市立富山高等女学校は、大正2年4月に市立富山実科女学校として開校したあと、大正13年4月に市立富山高等女学校（以下、市富女）と改称した。市富女の学校登山は、大正12年の黒部探勝旅行に始まる[14]。また、大正14年には、五箇山登山も計画されている[15]。昭和2年から、立山登山を継続するようになった。昭和2年の立山登山は、県富女の日程に1日ずらして、7月23日に出発し、26日に下山している[16]。

昭和3年の立山登山については、同校『校友会誌第7号』（昭和4.11.30）に、同校の北野義周教諭が登山記を記している。それによれば、参加者は教諭5名・生徒28名・強力3名・写真師1名・その他付添2名であった。日程は4泊5日で、1日目は千垣駅まで電車を利用した後、称名滝を経由して弘法小屋泊。2日目は一の谷を経由して室堂営林署小屋泊。3日目は雄山から別山を縦走して室堂営林署泊、4日目は一部が御歌新道を下って立山温泉へ、大半は五色ヶ原まで行って、ザラ峠を下って立山温泉泊。5日目に下山している。

登山記には、「思うに男子の登山者ですら雄山一山を登って満足して帰る者が多いのに、女学生団隊なる我が一行は別山、大汝、雄山、浄土、加うるに龍王、獅子、鬼、ザラ峠、五色に至る縦走を事無く完了するを得たるは実に立山における新記録であらねばならぬ」とあり、女学生にも男子学生に負けない体力があることを証明する画期的な試みであったことを強調している。

同校では、その後も毎年、学校登山を実施している。（表1）にあるとおり、ほとんどは同様の日程で立山登山を実施しているが、昭和9年に富士山登山、昭和12年に槍ヶ岳登山、昭和15年に白馬岳登山を実施している。

2.4　魚津高等女学校の学校登山

県立魚津高等女学校（以下、魚女）は、大正10年4月、県下で3番目の女学校として開校した。魚女では、開校翌年の大正11年から、希望者を募って2泊3日の黒部探勝を続けてきたが、大正13年に事故が起きた

ため、以後中止された[17]。その後しばらく、学校登山は計画されなかったようである。

昭和4年になると、新聞に同校の立山登山計画が報じられるようになる。『富山新報』(昭和4.7.25)には、「立山登山を試むべく希望生徒を選択中…同校山岳部の編成は本年初めての試みであると」とあり、この年に計画のあったことが窺える。ただし、実際に行われたかどうかは不明である。

同校校友会誌『晒光6号』(昭和6.11.15)には、昭和6年9月7日の第7回同窓会総会の議事報告として、「十周年記念の一部に於いて開催、…山岳部の設立報告(7月18日臨時会決議)。山岳部は同窓会、校友会の共同事業として経費は相互負担とする。(山縣教諭)…」とあり、昭和6年に山岳部が設立されたこと、山岳部の活動は同窓会と校友会の共同で行われたことがわかる。また同紙には、昭和6年の立山登山記録も掲載されている。それによれば、一行27名で、日程は3泊4日であった。1日目は材木坂経由で弘法小屋泊。2日目は一の谷経由で室堂泊。3日目は雄山登頂後、五色ヶ原を経由して立山温泉泊。4日目に下山している。

その後、(表1)にもあるとおり、はぼ毎年ルートを替えながら立山登山を実施している。参加生徒は30名を上限とし、卒業生も参加できた。

3　女学校登山の特色

次に、女学校登山の特色を、旧制中学校との比較で明らかにしてみたい。高等女学校と旧制中学校はともに、小学校卒業生の一部を男女別々に教育する学校であるので、両者の学校登山を比較することにも意味があると思われる。なお、旧制中学校における学校登山については、筆者が昨年本書に記した論考を利用する[18]。

3.1　日程にみる特色

女学校の中には、立山登山に関しては、旧制中学校に見劣りしない山行をこなしている学校もあった。まず県富女の場合、(表1)からもわかるように、昭和2年には3泊4日で雄山と浄土山に登頂しているだけであるが、昭和3年には4泊5日で雄山から別山まで縦走し、昭和4年には五色ヶ原まで足を伸ばしている。県富女ではその後、五色ヶ原まで足を伸ばしている形跡はないが、市富女の立山登山は4泊5日を基本とし、別山から五色ヶ原までの縦走を続けている。これはかなり体力を使う山行である。

旧制中学校の場合、3泊4日でこの縦走を行っている例も見られる。その場合、1日目は弘法小屋泊、2日目は雷鳥沢を経由して剱御前小屋泊、3日目に別山から五色ヶ原を縦走して立山温泉泊、4日目に下山となっている。それに対し、市富女の場合は、1日目は弘法小屋泊、2日目は室堂営林署小屋泊、3日目に雄山から別山を縦走し室堂営林署小屋泊、4日目に浄土山から五色ヶ原を縦走して立山温泉泊、5日目に下山となっている。当時、室堂営林署小屋は事前に申し込めば無料で利用できることになっていた。営林署小屋を2日間使ったのは、日程的に余裕を持たせることもあったが、経費節約という側面もあった。

昭和3年の市富女の立山登山を記した同校『校友会誌7号』(前掲)には、前述したように、同校の立山登山が、同校女子の体力が決して男子に劣らないことを示す意図もあった。一方で、同会誌には、「本校の宿泊は自炊を本体とした。米、味噌、鍋以外の材料器具は凡て持参した。生徒一人の負担重量は一貫五百匁で内約五百匁は強力に運ばした。…帰るさいにはい松の枯枝を見た。余は重宝なる薪炭材料なるを思い、室堂は薪炭材料乏しきため一束十本位のが二円の代価を払わねばならぬ事を話した。各生徒は打ち驚きそれではと手に手に枯枝を集め始めた。各々枯枝を抱いて山を下る様実に雄山の神をして感心せしめずには置かなかった。これを見た登山客は誰も誰もその元気さに舌をまかぬものはなかった」とある。ここでは、登山に

参加した生徒が、元気で質素倹約を心がける当時の理想的女学生として描かれている。この記述や営林署小屋の利用には、登山は贅沢な遊びという世間の批判をかわすねらいがあったのかもしれない。

剱御前から五色ヶ原まで縦走した例としては、昭和7年に県高女でも行っている。この場合は、1日目は追分小屋泊、2日目は一の谷・雷鳥沢を経由して剱御前小屋泊、3日目にザラ峠を経由して立山温泉に泊まっている。この登山を記した同校『校友会誌24号』(昭7.12.1)によると、3日目は、剱御前小屋を午前5時30分に出発し、立山温泉には午後8時過ぎに着いている。ザラ峠の下りで、しばらく道に迷って時間をとられたようであるが、それにしても、午後8時過ぎまで行動するというのは危険である。3泊4日でこのコースを踏破するのは、男子でも大変だが、女子の場合はもっと大変であろう。県高女では、その後、3日目には別山から雄山を縦走したあと、松尾峠経由で立山温泉に下る日程に変更している。

なお、このような厳しい日程をこなせた理由として、体力のある生徒で組織されたということもあるがに、ガイドの存在も忘れてはいけないだろう。県富女の場合では、生徒5人にガイド1人の割で雇って、生徒の荷物を持たせることもあった。他校でも、最低10人に1人の割でガイドを雇って荷物を持たせている。生徒たちが背負う荷物が少なかったことで、上記の強行日程が可能になったといえる。

ところで、旧制中学校のなかには、昭和初期から山岳部として独自の活動を展開し、立山以外の山行を行うようになる学校があった。たとえば、魚津中学校は地元の山の新ルート開拓を精力的に進める一方、北アルプスの難コースにも果敢に挑戦していった。富山中学校や高岡中学校でも、昭和10年前後から立山登山以外の計画も立てている。それに対して、女学校の場合は、昭和10年代になっても、圧倒的に立山登山が多く、複数の計画がある場合でも、他は五箇山や黒部渓谷である場合が多かった。県内の女学校では、旧制中学校にみられるような山岳部としての発展がみられず、立山登山で満足する傾向があったといえよう。そのなかで、市富女での、昭和9年の富士山登山、昭和12年の槍ヶ岳登山、昭和15年の白馬岳登山は注目に値する。

3.2　女学校山岳部の特色

女学校のなかには山岳部を組織する学校もあったが、女学校の山岳部とはどのような組織だったのだろうか。

県富女では昭和2年に山岳部が設立された。同校『同窓会報30号』(昭和5.5.16)には、昭和4年度の登山部記事として、「立山登山。これがこの部の全生命である。というと貧弱なる業績と笑われるかも知れぬ。けれど私はその笑いに甘んじる。立山登山を以てしかく軽くは見ないからである。女性である。そして毎年違う生徒であるからである。…只山に於ける宿泊の設備の貧弱なるため多数の志願者をして、あたら不参の憂き目にあはすことは残念である。」とある。この記述からは、山岳部の目的が立山登山にあることと、参加者は毎年希望者から選抜していることがわかる。

昭和4年の場合、参加者は、教員8名に、卒業生1名、専攻科生1名、高等科1年生3名、補習科生6名、女学校4年生10名となっている。この時の参加者高島かのさんの記憶によると、「4年生約200人から希望をとったところ、約50名が希望した。そのうち体格検査によって、10名が許可された」という。参加者の女学校在校生と卒業生の比率は、だいたい半々である。この後の登山記録をみても、同校では参加生徒は4年生以上で、卒業生も参加している。どちらかといえば、卒業生が優先されていたようで、卒業生の参加人数によって、在校生の参加人数が決められていたようである。

なお、立山登山を行う理由については、同校『同窓会報30号』(前掲)に、「山岳が持つ神秘的壮快。それを女性にも味あわせたい。殊に立山山下の近代性に生きる女性に。登山は壮快と共に危難を伴う。女性の合理化されたる登山。これが我が部の全国的存在の意義である。」とあり、女学校登山の先駆者であるとの自負が見える。

一方、県高女で山岳部の名称が見えるのは、同校校友会誌『ふたがみ 28 号』（昭 12. 3. 6）からである。それ以前は、有志による立山登山という表現になっている。夏の立山登山だけの活動だったために、登山部という認識が薄かったものと思われる。同校の昭和 12 年の立山登山参加者の証言によれば、2 年生以上から希望をとり、希望者には 200 メートルのグランドを 9 周走るという体力テストと健康診断が課せられたという。立山登山が厳しいことは知れ渡っていたので、体力に自信のあるごく少数の者しか希望しなかったこともあって、希望した者はほとんど検査にパスしたという。

また、市富女の場合、同校北野教諭が同校『校友会誌第 7 号』（前掲）で、「本校の立山登山は今後毎年行わるる一行事で御座います。本校校友会員は誰でも参加する事が出来ます」と記している。このことから同校では、全校生徒を対象にした希望による参加であることと、卒業生も参加できたことがわかる。同校では、昭和 2 年から山岳部の名称を使っていたが、この組織も、他校と同様、夏の登山だけのために組織されたものだった。ただ実際には、2 年生以上が参加しており、複数の参加者の証言によれば、運動部に所属していた生徒が教師から誘われることが多く、大々的に公募することはしていなかったようである。同校の大縦走登山については前述したが、それは運動能力のある生徒の集団だったから可能であったといえる。

魚女の場合は、前述したように、昭和 6 年に山岳部が設立され、山岳部の活動は同窓会と校友会の共同で行われた。

以上のように、女学校の場合、山岳部といっても日常的な活動はなく、夏の登山を実施するために毎年組織されるものであった。しかも、在校生だけでなく卒業生も参加できるところに特徴があった。年に 1 回しかチャンスがないために、在学中に運悪く行けなかった者もいただろう。そういう者にとって、卒業後にもチャンスがあることは有り難かったことであろう。女学校を卒業すればまもなく結婚するのが当たり前で、しかも結婚すれば、家事に追われ旅行に行くことなど不可能になってしまうような時代であった。結婚する前に、立山登山を経験しておきたいと願う女性も多かったことだろう。そういう女性たちにとって、学校の同窓会という組織はその願いを叶えてくれる唯一の存在であった。教諭側も、彼女たちのそういう立場を理解して、登山計画を立てていたのであろう。彼女たちの登山記には、これが最初で最後の立山登山であるという感慨が溢れている。当時は、現在のような便利な時代が来ると誰が予測できたであろうか。

3．3　登山中の活動に見られる特色

旧制中学校の立山登山では、成人登山の意識や野外学習という側面が強かったのに対して、女学校の登山では、旅行を楽しむという意識が強かったように思われる。

市富女の昭和 3 年の立山登山を記した『校友会誌 7 号』（前掲）には、「リュックサックに秘めたりしハーモニカ、尺八の合奏又は独唱始まり、全く天女の舞か仙人の遊びもかくやと思わせた」とある。また、同校の昭和 5 年の立山登山を記した『校友会誌 9 号』（前掲）には、3 日目の室堂小屋で「夕食後小屋の前で、昔の昔に親爺になった先生まで、手をつないで歌を唄って大はしゃぎをした」とある。これらの記述から、女学生と教諭が一緒に、大自然の中で音楽やダンスを思う存分楽しんでいる様子が目に浮かぶ。雪渓を莫蓙で滑って遊んだという記述も、いくつもの校友会誌に見られる。

楽しむことを大事にすることは、登山を終えたあとも思い出を楽しむという形で続いた。県富女の昭和 2 年の立山登山を記した『同窓会報 28 号』（前掲）には、「立山登山の茶話会／作法室で／九月上旬の夜／活動写真／自分等の姿を映画画面に見て喜び感想を話し、一夕を山の会として心ゆくばかり楽しむ事が出来た」と記されている。このように、県富女では、「茶話会」と称して、後日保護者への報告を兼ねて思い出話に花を咲かせる会合を開いていた。その際には自分たちの姿を写した映画も上映されたようである。また、同校の登

山には、山岳写真家として知られていた中野峻陽氏が同行して記念写真を撮ることが多かったらしく、希望者に頒布していた。

市富女でも、同じような会合が開催されていた。同校の北野教諭宅には、大正末期から家庭用活動写真機として普及したフランス・パティ社の撮影機と映写機が今もあり、昭和5年の立山登山を撮影編集した9.5㎜フィルムも保存されている。後日の茶話会等で上映するために編集されたものであろう[19]。また同校でも、毎年写真師が同行し、参加者に記念アルバムが配布されていた[20]。これらのように、後日茶話会を開いたり、写真や映像にして思い出を楽しむということは、旧制中学校では見られないものであった。

4　おわりに

これまで、富山県内の高等女学校4校の学校登山記録の分析を通して、女学校登山の特色を述べてきた。その結果、女性の登山開始には、男性の場合と比較にならないくらいの困難が横たわっていたことがわかった。その代表的なものが、女性がスポーツをすることへの抵抗と女人禁制意識であった。そして、その両者の影響力の及ばない場所が学校であった。学校という組織のなかで、女性たちは登山に親しむ機会を与えられることになった。また、学校を卒業した女性にとっては、同窓会が学校とのつながりを維持する貴重な存在となり、同窓会を通じて登山に親しむ機会が与えられた。

県下で最初の女子団体登山は、大正8年の女子師範と県富女合同の立山登山であった。この立山登山は、女子師範同窓会が主導した計画に、県富女の生徒が便乗させてもらうことで可能になったと思われる。このときの登山が無事に終了していれば、その後女子登山はスムーズに普及していったにちがいない。しかし、暴風雨に見舞われたことで、女子の立山登山継続は困難になった。その後、各校で地道な実績作りが行われたことは、前述したとおりである。

地道な実績の積み重ねにより、昭和初期に、女学校登山の全盛期を迎えることになった。旧制中学校の場合には、山岳部がしだいに独自の活動を展開することもあったが、高等女学校の場合は、ほとんどが立山登山で満足していた。当時の立山登山は、山麓から徒歩で登る日程で、現在よりもはるかに苦しい行程であった。しかも、交通費・宿泊費・ガイド代などに要する費用は相当な額であった。そのため、参加者は体力があり、なおかつ経済的に恵まれたごく少数の者に限られた。それだけに、立山登山を経験できただけで充分に感激したのである。

また、生徒たちには、立山登山は一生に一度だけという思いがあった。そういう生徒の立場を理解する教師たちは、一度の立山登山でなるべく多くの立山の魅力を体験させたいと思ったことだろう。その配慮から大縦走登山が計画される場合があった。大縦走登山に参加した生徒の手記は、苦しさよりも喜びに溢れている。その体験は一生の思い出となったにちがいない。一方では、女性の体力が男子の体力にも劣らないことを見せつける機会でもあった。それだけに、参加生徒には女学校代表という意識もあっただろう。

このような希望者による楽しい立山登山は、昭和18年まで継続されたことはわかっているが、戦争が激しくなると取りやめられたようである。しかし、この伝統は、戦後まもなくから、新制高校に受け継がれていった。

一方、太平洋戦争中、旧制中学校で見られたように、鍛錬を目的に学年行事として、立山登山を行う女学校もでてきた。その例が、新湊高等女学校と泊高等女学校であった。どちらも昭和15年に紀元2600年を記念して創設された学校であった。新設校のため校風を早く確立する必要もあって、昭和17年に3学年の行事として立山登山を行っている。このような立山登山もあったことを見逃してはならない。

註

1）『日本女性登山史』（大月書店、1992）38～41頁、101～112頁

2）前掲『日本女性登山史』39頁

3）『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991）136～137頁

4）『現代日本文化における伝統と変容６、日本人と遊び』（ドメス出版、1989）108～110頁

5）『権力装置としてのスポーツ』（講談社、1998）40～42頁

6）（『富山県教育史』富山県教育史編さん委員会、1972、下巻815～816頁）

7）『富山新聞』（昭和50年８月18日）「越中おんな一代11」

8）『北陸タイムス』（大正６年７月18日付け）は、「女子師範＝立山登山の壮挙」という見出しで、富山県女子師範学校の立山登山計画を報じている。これを受けて、『山岳第11年３号』（大正６年９月18日発行）751頁にも、「女学生の登山熱旺んなり」という見出しで、この登山計画を紹介している。しかし、大正８年の登山の記事に、ほとんど「初の…」と冠せられていることから、この大正６年の計画は実施されなかったと思われる。同窓会で要望があったため計画はされたのであろうが、直前で中止になったと思われる。

9）同様の回想は、『県立富山高女・富山女子高校学園物語、清泉に華ありて』（富山新聞社、1983）51～53頁にも、片口百合さんの名で記されている。

10）『富山日報』（大正12年７月５日付け）

11）『県立高岡高女・高岡西部高菊友薫りて』（富山新聞社編発行、1984）41頁

12）この五箇山登山は、当時の文部省による夏期休暇中の学校行事に関する調査で、女子中等学校に於けるものの１例として、紹介されている。『大正七、八、九、三箇年間に於ける全国夏季体育的施設』（文部大臣官房　学校衛生課、大正11年6月20日発行）146～147頁

13）『高岡新報』（大正14年7月30日）

14）同校校友会誌第２号に「黒部探勝の記」が掲載されている。

15）『富山新報』（大正14年７月15日）に、「はじめてのこころみとして破天荒の五箇山探勝団を組織することに決定した。…３、４年生中健康診断の上20名を厳選して決行する由…」とある。

16）『富山日報』（昭和２年７月28日）

17）『魚高八十年史』（魚津高校編、昭和53年３月10日）188頁

18）拙稿「旧制中学校における立山登山の歴史」（『富山県立山博物館研究紀要第12号』、2005年３月所収）

19）富山県立山博物館平成17年度特別企画展『ちょっと昔の学校登山－写真でたどる大正・昭和の立山登山』（富山県立山博物館編発行、2005）20～23頁に、その映像の一部が紹介されている。

20）前掲『ちょっと昔の学校登山－写真でたどる大正・昭和の立山登山』16～17頁、24～25頁に、一部が紹介されている。